

祈りとなり、また、兄弟たちの献身的な労働ともなったのです。

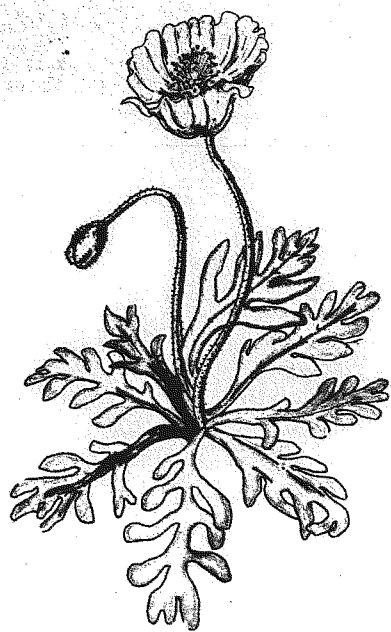
基礎土台作りは兄弟たちの手でなされました。職場を終えてから、あるいは大学で授業を終えてから、夜間、電灯をつけ、冷たい北風の下で土掘りの作業がなされたのです。慣れない者にとって、それはそれはたいへんな苦勞でした。すぐに雪の降る季節になるので、作業は急がなければなりません。他の所ではすでに雪も降り始め、寒さも増し加わっていました。定例集会のある夜などは、兄弟たちが作業し、姉妹たちが雪が降らないように、コンクリートが凍らないようにと祈りました。

不思議にも工事が終わるまで雪が降らず、コンクリートも凍らず、工事は目標通りに完成し、クリスマス特別伝道集会、子供会を新会堂で行うことができました。工事に必要な金額も主のなさったいろいろな証しを伴って満たされましたし、兄弟たちの献身的な一致の霊もまた素晴らしいものでした。

あれから十年、今はこの会堂も狭くなり、来年（一九八六年）を目指して新会堂建設のビジョンに燃えつつ、主人と共に宣教のわざに励んでいる日々です。

「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」

アーメン



アイスランドポピー

第三章 妻として、母として

三橋 幸子

我が子へのビジョン

一昨年の秋、ブラジル伝道の帰り、長男夫婦の宣教の地ハワイを訪ねました。息子が計画した特別伝道集会で主人がメッセージをし、私が証をし、異国の地で親子ともどもに伝道する機会に恵まれたことは、私共にとって感無量でした。魂を愛し懸命に宣教のわざに励んでいる息子の姿を見ることは、母親の私にとって格別な励ましであり、また慰めであり、誇りにさえ思いました。幼い時から息子に対して抱いてきた私の念願のビジョンをハワイの地で見る事ができたのです。

希望の大学の門が堅く閉ざされ、息子ともどもに心の痛みの中にあつた時、「これは災いではなく希望のあることです」というみごとはを神様から頂き、事を隠される主に信頼して息子の前途をゆだねました。

主はことのほか早く、思いに勝る素晴らしいみわざをなされ、留学、結婚、そしてハワイの地へ宣教師として遣わされたのです。

ハワイで孫を抱いて（一九八三年）



その地で生まれた六か月になったばかりの初孫を抱いたその感触、その感動は幼い時の息子と交錯して、我を忘れわが子を育てた時の思い出に浸ったのでした。

昭和三十二年（一九五七年）一月十一日、三千六百グラムの丈夫な男の子が与えられました。私が聖書学院に入学した一年後でした。預言者エリヤの名にちなんで恵理哉と名付けたのには深い願いと祈りが込められていました。

結婚とは名ばかりで、たとえ生まれたとしても体質の弱い子であろうというのが、私たちの結婚に対する周囲の人たちの反対理由の一つでもあったので、「男の子を与えて下さい、丈夫な子を与えて下さい、丈夫な男の子を与えて私を辱しめないで下さい」と祈って

いたのです。

生まれる場所も、手伝う人も、お金もきわどいところで備えられ、へその緒をからませながらも、元気な産声を上げました。冬は零下二〇度以下を記録する寒い所で、火の気のない寒い小さな部屋に、生後三、四週間にして行李に寝かされ、一人置かれることが幾たびあったことでしょうか。

聖書学院の生徒として厳しい訓練の最中であつた私共にとって、世の親たちのようにわが子と共に過ごす時間はほとんどなく、「天のみ使いがこの子を守りして下さい」と泣き声を背にドアを閉め、かぎをかけ、泣き声がやむまで折つたことが何度あつたことでしょうか。

そんな中で恵理哉は順調に成長しました。十か月頃にしてオムツをはずし、歩き始めたのも早く、一歳の誕生日には雪の中を歩いていくくらいです。

午後一時頃他の町へ伝道に出かける両親は、夜の十二時頃でなければ帰れませんので、夕食はだれかに食べさせてもらわなければなりません。そんな時のおもちゃは、インクびんや肝油の入ったカラシカン鳴る缶やキャップのついたママのペンでした。ママの物は何でも欲しいのです。うっかりベビーサークルのそばに置くものなら、皆おもちゃにされてしまうのですが、特に大事にしているママの聖書を見つけては、すばやく取り、破つて口に入れてしまったのには驚きました。エレミヤのように、みことばを食べ、この頃から心の中で燃えようとした

のでしょうか。二冊ほど、食べられたのです。

長時間の留守の間、きつくしめたはずのインクびんでも、缶でも開けてしまうのです。まさかあの小さな手では開くまいと思つていたのに、唇を真つ黒にし、布団に黒いしみをつけ、腹ばいで眠っているわが子を見つけた時には、驚きととまどいと涙なしにはいられませんでした。

肝油が八十個ほど入っていた缶を空にしていた時もまた、全能なる神のみ力とそのみ守りに信頼するほがありませんでした。

たとえインクを飲もうと、八十個の肝油を食べようと、あるいは聖書を食べたとしても、この幼い恵理哉は見えざるみ使いに子守りされていたのだらうと信じるのみでした。

それにしても厳しい学院での子育ては、私の訓練をいっそう厳しいものにし、当座は決して喜ばしいと見えず、かえつて悲しいとさえ思われた軽井沢の四年間でした。

それはハプニングと涙と折りでつづつた戦いの日々でもありました。

特にミルクを買いお金すらなく、祈つて与えられた数々の証しを思い返してみる時、からすに食べ物を運ばせて預言者エリヤを養つたように、わが子恵理哉のためにもからすとなられた多くの人々を備え、神ご自身が養つて下さつたことを感謝せずにはいられません。

ある日のこと、ミルクを飲ませながら「恵理哉、神様が与えて下さらなければ明朝はミルク

がないのですよ」と言い聞かせたこともありましたが、まだ何もわからないみどり子でしたが、「日ごとの糧を今日もお与え下さい」と神に頼って養われるべき信仰を親子ともども学ぶためにも、子を抱きながら「神様、ミルクを買うお金二千円をどうぞ明朝までにお与え下さい」と真剣に祈ったのです。

いつものように早朝の祈祷会に主人を背負って出かけようとした時、玄関の戸に四つ折のお札がはさんでありました。ちょうど二千円でした。家の回りは家畜小屋で、私の祈りを聞いた人はだれもいなかったでしょう。

見えざる所で働かれる神ご自身が時になつてうるわしいことをなさって下さったのです。また、軽井沢から四十キロくらい離れた上田市に、一週間ほど伝道旅行に出かけたことがありました。その頃三歳だった恵理哉は、学院のある姉妹に預かってもらいました。

後になって聞いた話によると、恵理哉は、学院のだれかに、「パパとママはどこに行ったの、寂しくないの」と聞かれると、「パパとママは伝道旅行に行ったの。恵理哉はいい子でいるの。イエス様が一緒だから、寂しくないの」とよく答えたそうです。

夜になり、寂しそだったので、お人形さんを抱かせ、「これをママの代わりにして一緒におねんねしなさい」と言うと、「ううん。これはママじゃないの、お人形さんなの。ママのよきに口をきかないもん」と言っただけです。

「恵理哉君、おりこうさんにおねんねしましょう。」

「お人形さんは口きかないけど、イエス様が一緒だからいい子でいなさいって、ママが言っただけなんですね。」

いつもこうして言うことを聞いていたようです。

毎朝、目を覚ますと、まず自分の家の前に行つて、「パパ、ママ」と声をかけるのだそうです。そうしてから食事をし、遊びます。夕方になると、また家の前に行つて「パパ、ママ」と呼び、パパとママがいないことを確かめてから姉妹のところへ帰ってくるのです。

こんなことを一週間繰り返し、いよいよ私たちが帰ってくる日になりました。朝早く目を覚ました恵理哉は、いつもの通り自分の家の前へ行つて「パパ、ママ」と呼んでみてから、隣の家へ行き、「かぎを貸して下さい」と頼みました。

「あれ？ かぎどこへ置いたんだろう。」

隣の奥さんがうつかりそう言ってしまったそうです。

「かぎがないと、パパとママが入れないでしょう。」

「わあー」と泣き出した恵理哉にあわてた奥さんが、「悪かった、悪かった」と急いでかぎを探し、ドアを開けると、「開けたままにしておいて。パパとママが入れないと困るから」と言っただけのこと。

私たちの姿を見つけた時は、転がるように走ってきて、「パパ、ママ、ママ」と言いながら泣き出し、離れようとしません。二、三日はどこへ行くにもついて来ました。どんなに寂しい思いをしながら私たちの帰りを待っていたかを思い知らされ、忘れることのできない思い出です。

聖書学院卒業後、私共は三歳半になった長男を連れて、新しい伝道地函館に移ることになり、彼はそこで幼年時代を過ごしたのです。夫と二人で伝道旅行に出かける時には、恵理哉をだれかにお願いして行くのが常でした。

ある時のこと、預かった姉妹が夜寝る前に恵理哉と一緒に祈った後で、「恵理哉ちゃんは、大きくなったら何になりたいの」と聞くと、恵理哉はたいへん驚いて、「ボクの祈りを聞いていなかったの、ボク大きくなったら伝道者、説教者にして下さいと祈ったでしょう」と不満げに答えたということです。

わが子に対するビジョンは、彼を身ごもった時から祈ってきたものです。

預言者エリヤのように勇敢に戦う伝道者であり、説教者でありますようにと、また神のしもべならば、大胆で冒険好きでもなければと願っていました。

母のその信仰、その祈りが、幼い恵理哉の心の中におうむ返しのように伝わっていったのでしょう。恵理哉もまたこの頃からそのビジョンに捕らえられていたのかもしれませんが。

父母が仕えている神の働かれる偉大な力に、肌で触れてきたこの幼い魂は、父母のいない時の寂しさ、悲しさの中で、神のいつくしみ、その慰め、愛のみ守りを体験してきたでしょう。自分もまた神に従って、父母のような信仰生涯を送りたいと幼心に焼きついていたことを、後日彼の告白から知らされたのでした。

彼は、中学、高校時代に様々なところを通らされながらも、神を恐れる道から外れることはありませんでした。クラブ活動を選ぶにも、進学コースを選ぶにも、彼の心の中心を占めるものは神を第一にすることでした。

先生が、「高校生としては満点をあげるが、受験生としてはそうはいかん。土曜、日曜日も、もっと勉強しなさい」と言われたそうです。しかし彼は高校生の聖書研究会を作り、土曜、日曜日は神にささげたのでした。

神にゆだねての大学受験が始まったのですが、彼の志す大学の門は堅く閉ざされてしまいました。コンピュータの計算では合格範囲を示すのですが、不思議なほど、その門は開かれなかったのです。

受験生としてのつらい経験を繰り返しさせられた彼には、これこそ神がお与えになった尊いレッスンで、へりくだるといふ学課を学びながら恵みのコースへと導かれたのです。

親子ともども、プライドの碎かれる時でもありました。

ようやくにして開かれた大学の門。

考えてもいなかった大学において、彼の願っていたコースを学ぶと共に、学内で聖書研究会を開くなど、学生伝道のために大いに活躍するチャンスをつかめることができたのです。

さらにその在学中にアメリカへの留学の道も開かれました。

そのことが一つのきっかけとなって海外への重荷が与えられ、宣教師としての召しを受けたのでした。ここに至るまでにはどうしても、あの苦しいつらい道のりを通る必要があったのです。思えば、幼い時から抱いてきたビジョン、祈りの中に待ち望んできたこのビジョンが今や、具体的にこのハワイの地で実現され始めたのです。

ホノルル空港を発つて帰国する日、息子夫婦の見送りを受けながら、私の心はわが子になされたご恩寵あふれる主のみわざをほめたたえずにはおられませんでした。

函館の地で生まれた次男にもまた、主のみ旨がなりますようにと、母として祈らされたのでした。

嬰与志哉

次男与志哉が生まれた時はとてもかわいく、女の子みたいだったので、「ヨシコベビー」と呼んでいたものです。

私の母乳も三か月くらいまではよく出ましたが、動き回っているうちに出なくなってしまう、ミルクに切り換えなければなりませんでした。恵理哉の時は、健康的にも経済的にも苦労したため、今回は牛乳を与えることにしました。一日分をまとめ買ひして、お店の冷蔵庫に預かってもらい、飲むたびにもらいに行くのです。

初めは水で薄めながら徐々に飲ませていましたが、やがて、健康で何でも食べる丈夫な子に育ってほしいとの願いから、鶏ガラスープや野菜の煮汁などで薄めて飲ませるようにし、早めの離乳食を始めました。好き嫌いのない子に育てるという意味からも、まだよく味のわからないうちに、まんべんなく食べさせたことは良かったと思います。

与志哉は、小さい時から日光浴や乾布摩擦をさせました。体質が弱く、病気がちだと本人に

とつととても不幸なことですし、特に私の場合、あまり子供に手をかけてやれませんから、なおのこと病氣にかからない健康で丈夫な体になってほしかったのです。与志哉も乾布摩擦はとも好きだったようです。大きくなってからも、冬の朝、裸で廊下を走ったり、乾布摩擦をしていたものです。近所の子供たちが風邪をひいて医者に行く時にも、与志哉はほとんど風邪をひいたことがありませんでした。

与志哉が生まれて間もなく、留守番をしてくれる姉妹を家に迎えました。

与志哉は恵理哉と違い、どちらかといえば性格的にやさしく、臆病なところがありました。私たちが伝道に行く時、恵理哉は決して後を追わないのに、与志哉はそのたびに後追ひし、わめくのです。

急いで出かけなければならぬ時など、この姉妹に近くのお店屋さんに一緒に買い物に連れていってもらい、その間に出かけたものです。姉妹が留守番していてくれるので、とても安心でした。

与志哉は何かことが起こるとすぐ泣きわめくのですが、大きくなるに従い、自分の意思表示をはっきりしないことに気づきました。日常生活の中でも、来客中や伝道に行った先で泣きわめかれるのは、私にとってやりきれないことでした。

恵理哉はとてよく言うことを聞く従順な子であっただけに、与志哉も同じようにしてくれ

るだろうと期待していました。それだけに、どうしてこの子は言うことを聞かないのだろうという思いが、逆に与志哉を大きく傷つけていったと思うのです。私自身、与志哉には恵理哉と同じように対処しようとしていました。与志哉には与志哉なりの取扱いがあるのを気づかなかったのです。

この子の立場からこの子を知り、母親らしいやさしさとゆとりのある気持ちで聞き、時間をかけてやるべきでしたが、与志哉の表面だけしか見ていませんでした。

与志哉が、私の知らないところでいろいろな寂しい思いと戦っていたことを、後々知らされるのです。彼は彼なりに、こんなことを言ったらママは理解してくれないだろう、怒るかもしれない、心配するかもしれないと考え、あのような表現になったようです。どちらかという私は完璧なものを要求し、厳しいものを感じさせていたようで、心を開いて甘え、何でも話せる母親ではなかったように思います。

彼が良い子であるように、こういうビジョンに向かって成長するようにと祈る前に、私は、どんなに理解のない母親であつたか、彼の心を見抜くことのできない、そのやさしさを引き出すことのできない母親であつたかを示され、神の前に深く悔い改めさせられました。そして私が悔い改めたその時から、彼も変わり始めたのです。

小学一、二年生の頃だったと思います。与志哉が学校から泣きながら帰ってきました。

「どうしたの。」

「体育の時間、ほくだけ飛び箱を飛べなくてみんなに笑われてしまったんだよ。」

情けなさそうに言うのです。でも、与志哉にはイエス様に頼る単純な信仰がありました。

「与志哉だってできますよ。あのね。飛ぶ時、怖いような気がするでしょ。飛ぶ前にイエス様に祈ってごらんなさい。イエス様は勇気を与え、力を与えて飛ばせてくれます。明日、そのようにやってごらんなさい。ママも祈ってるからね」と励ましました。次の日、与志哉は喜び勇んで学校から帰ってきました。顔を輝かせて言う彼のことには自信がありました。

「飛び箱を一段、二段と飛んでね。ママ。だれも飛べなかった三段まで与志哉が飛べたんだよ。みんなびつくりしてさ、先生だって驚いて『与志哉、どうしたんだ。すごいじゃないか』ってほめてくれたんだよ。」

神様は信じて頼る者を辱めませんでした。このレッスンは与志哉にとって、とても素晴らしい経験となったのです。それまで嫌いだったスポーツ、鉄棒、マラソン、剣道の道で自分を鍛え、意欲的で積極的な性格に変わってきました。

与志哉が高校入試を目前にして受験勉強に励んでいた時のことです。友達と馬乗り遊びをしていて、右手の小指の骨を折ってしまい、字が書けなくなってしまったのです。

この出来事は、彼の信仰の試練の時となりました。主の真実を信じて、すべての道において

主を認め、主に頼るべきことを学ぶ必要があったのです。私は、自分のベストを尽くして後は主にゆだね、真剣に祈りましょうと励ましました。しかし、最後の勉強にはなかなか身が入らず、気持ちがあせり気味で落ち着かないようでした。

受験日にはかろうじて字が書けるようになったのですが、やはり思うようにならず、すれすれの点で不合格となってしまうたのです。

主人と私は万一のことを考え、発表される前から私たちの伝道旅行に同行させ、沈みがちな彼の気持ちをなんとか慰めようと考えていました。その旅行先で不合格の知らせを受け取ったわけですが、がっかりしながらも、すべての道において主を認め、私立高校の入学手続きのため、彼だけ一足早く札幌に帰すことにしたのです。

その私立高校に入学金を持っていく前に、自分がお世話になった先生方にあいさつをしようと思った彼は中学に寄りました。

ちょうどその時、中学では、公立高校に不合格だった三橋与志哉が補欠で合格したという、異例の知らせに、先生方が驚き、喜びにわいていたところだったそうです。そこに与志哉がタイミングよく行ったものですから、職員室中に歓声が上がりました。神様のなさることは本当に不思議としか言いようがありません。私立高校にまっすぐ入学金を持っていかなかったことも感謝でした。何十万円かがむだにならずにすんだのです。

入学式の校長先生のごあいさつからも神様のご摂理を感じました。

「今回の合格者は必ずしも点数だけにこだわりませんでした。合格点に達しなかった者の中でも、この学校にふさわしい者は入学させました」と言われたのです。

与志哉にとっても、私にとっても信仰の試練の時でしたが、主の恵み深い配慮に触れて、与志哉は非常に感動し、この恵みをなおざりにしてはならない、主の栄光のために懸命に勉学に励まなければと意欲を燃やし、遠い学校に遅刻することなく通い続けました。

補欠で入学したことは、謙遜を学ばせられたことでした。三年間、主のみに頼り、すがりながらの高校時代でしたが、卒業式時にはクラス代表で卒業証書を授与される栄誉にあずかりもしました。彼はそれまでの主の恵みを一つ一つ思い浮かべながら、一段一段踏みしめて講壇に上っていったそうです。卒業証書を手にした感激と、主のみ手にある愛護の深さに感激の涙が心深く染みとおっていたであろうことを、彼の満足そうな笑顔から感じたのでした。

私もまたその卒業式に列席し、わが子の晴れ姿を見ながら、背後にあった主の深いご配慮に、何ともいえない感謝の涙があふれてくるのでした。

母と子

「クリスチャンの母親は、子供をどのように受け止めるべきでしょうか。」

私はこの問いに対し、「一般の人たちのように、子供をつくるとか、つくらないとかと考えるのではなくて、母親は、神様からその子を委託された者として、使命と責任を持って育てるべきです」と答えます。

私自身は、子供を、神を恐れ神に栄光を帰する者として育て、神にお返しすることができればとひたすら願ってきました。けれども、なんとふつかな、失敗の多い母親だったことでしうか。初めての子供が一歳であれば母親も経験一歳の母親です。ただ主の恵みとあわれみにすがり、無我夢中で育ててきたのです。

大きくなった息子たちから、「ぼくらは、幼い時から神の存在を一度も疑ったこともないし、祈りに答えて下さる神であることを、父母の信仰生活から堅く信じてきた」と聞かされるのは大きな慰めであり励まします。

母と子の関係を無視して人間教育を論ずることはできません。母親の愛護のもとにある時代が人間の一生を支配する大切な時期であると言われるように、母親の愛護が正しく、深く行き届き、神の代行者としての働きが果たされていくなら、その子供は一生の間、愛と正義と純潔を目指して進み、崇高な人格が形成されるのです。このように、母親の存在と影響力がいかに大きいものであるのかを思い知らされた時、良き子供であるようにと願う前に、良き母であらねばと、主のみ前にひざまずき、自分自身が碎かれなければなりませんでした。

幼い子供たちの心は、白い紙に描かれた絵のようなものです。母親をまったく信頼し、ゆだねきり、母親の慕うものを慕い、母親のあがめるものをあがめ、母親の仕えるものに仕え、母親を通して母親の信じている神を見るのです。つまり、母親が子供の心の中に自分の信じている神の像を描いているようなものだと思います。

ある牧師さんの幼い頃の話聞いてなるほどと思ったことがあります。

この方は、友達から「イエス様は男か、それとも女か」と聞かれた時、とっさに「イエス様は女だーい」と答えたそうです。イエス様は男であるということ、家庭でも日曜学校でも教えられて自分としては十分よく知っていたはずなのに、その時は母親のことを連想して、イエス様はお母さんのようにやさしく愛と真実とをもって守って下さる方だからと、母親の人格とイエス様の人格を同一化して考え、イエス様は女だと答えたのだそうです。

ある時、私が病気で寝ていると、幼い恵理哉が私のそばへ来て「ママ、どうしておねえねしているの」と聞くのです。「ママはね、今、頭が痛い痛いなの。」恵理哉は身を乗り出して「イエス様は治してくれるよ。恵理哉がお祈りしてあげるよ」と言いながら、自分の小さな手を私の頭の上に置き、「イエス様、ママの頭の痛いのを治して下さい。イエス様のお名前によってアーメン」と祈りました。そして、すぐに私の手を取って「イエス様は治してくれたよ、さあ、ママ起きなさい」と引つ張って私を起こしました。

恵理哉が具合が悪くなったり、転んで泣いたりすると、すぐそのところに手を置いて、「イエス様、恵理哉の痛いところを治して下さい。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン」と祈り、「もうイエス様が恵理哉の痛いところを治して下さいだったので大丈夫ね。泣くのをやめなさい、いい子ですよ」と言うものですから、自分にしてもらった通りのことを私にもしていたのだと思います。その祈り方、姿勢をそっくり模倣していたのです。主人は恵理哉のそのしぐさを見て、「ママとそっくりだね」と言ったものです。

また、ママの聖書、ペン、エプロン、スカーフが大好きでした。スカーフとエプロン姿でお茶わんを並べるお手伝いは一歳半か二歳頃から始めたのでしょうか。

主人と二人で宿題の聖句暗記をしているのを傍らで一生懸命聞いていておうむ返しのように言い始めたのも、この頃からだったでしょう。

愛しつけの基本

「子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。『あなたの父と母を敬え。』これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、『そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。』という約束です。父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい」(エペソ六・一一四)。

まず、親と子の関係は、子供が父母を敬うことから始まり、そのように子供の心を育てることが大切だと思っています。

両親に従うことを学ぶ子は、やがて神に従うことを学ぶようになります。つまり子供は、神に従う前に目に見える親に従い、神を敬う前に親を敬い、神を信頼する前に親を信頼し、神に対する態度を身近な親と子の秩序から習っていくのではないのでしょうか。

「子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです」(コロサイ三・二〇)。

これは子供たちが初めて覚えた聖句です。子供たちが両親に従わない時は、主が喜ばないこととして罰を与えなくてはなりません。親に従うことをしつけられなかったら、神に従うことも学べないだろうと思い、小さい時から教え込みました。口で説明しても理解できない頃から、善悪の区別を教えるために、スパンク棒(セルロイドの定規)でお尻をたたいたのです。痛さで二度とするまいと学ぶ子もいれば、ただ「痛いよー」と泣くだけで、何のためにたたかれたのか学ぼうとしない子もいます。

恵理哉は、自分が親に従わないことで呼ばれたとわかった時は、「スパンク棒を持ってきたさい」と言われると、素直に持ってきます。

「ズボンを下げなさい。お尻を向けなさい。」

「こうかい。」

「もっとパパがたたきやすいようにこちらに向けなさい。」

パパに言われる通りにしながら、「あまり強くたたかないでね」と不従順に対しては当然罰があるのだと観念しているようです。

一方、次男は同じ年の頃、気がやさしいのか「与志哉」と大声で呼ばれると、「こわいよー、たたくでしょう」と逃げ回るのです。二段ベッドの上段に駆け上ると、父親の手が届きませ

んから、なかなか降りてしようとしません。下の方から父親が「降りてきなさい。今すぐ降りてこなければ罰が倍になりますよ」と叫んでも、「こわいよー、こわいよー」と泣いて同情を求めようとします。

よく、子供が泣き叫ぶと、「今度からははいけませんよ」と言うだけで、子供がしたことがどんなに悪いことかをはつきり教えず、うやむやにしてしまう光景を目にします。

その場合、子供は、自分が泣き叫ぶことによって、親が自分に屈伏してくれると思ひ込むのです。そして親を自分に従わせたような勝ち誇った気持ちになってしまふのです。こんなことを繰り返していくと、わがままな性格になり、やがて子供が主導権を握るようになってしまふます。

子供が、泣き叫ぶことによって自分のわがままを通そうとする時こそ、親はいつもより多くたたき、その痛みによって、親を屈伏させることができないことを教えなければなりません。体罰を通して罪の恐ろしさを教え、神様がどんなに悪を憎まれるかを、そして罪に対しては必ずさばきがあることを知らせるべきです。

わが家の子供は罰を受けた後、すぐパパとママに「ごめんなさい」と言い、イエス様にも「ごめんなさい、赦して下さい」とお祈りしました。その後で私たちは子供たちを抱きしめて、チュウをしてやり、心の呵責を取り除いてやるのです。そこで初めて、悪いことはすっかり忘

れて再び喜んで遊びます。こうしないと、子供たちはすっきりしなかったのです。

函館に行つて間もなくのこと、主人がキャンプの講師に招かれ、三歳の恵理哉と一緒に連れていきました。会場が幼稚園の一室だったため、恵理哉は他の子と一緒に、すべり台やぶらんこで楽しく遊んでいました。それが、メッセージをしている主人や、聞いている方々にとって、とてもやかましかったのです。

集会が終わつた後、主人は恵理哉を呼んで「皆さんがここに集まってきたのは、イエス様のお話を聞くためなのです。今日集会をしていた時、恵理哉の騒ぐ声がうるさくて、お話がよく聞こえない人がいたでしょう。迷惑をかけたのですよ」と言いました。

恵理哉は「わあー」と泣き出し、「ぼくがたくさんの人に迷惑をかけたの。イエス様ごめんなさい。ぼくが騒いで迷惑をかけました。イエス様のお話が聞けなかったことを赦して下さい」と祈りました。

自分のしたことがどんなに人に迷惑をかけてしまったのか気づいたのでしょうか。涙ながらに深い悔改めの祈りをしたのです。このことは、私たちの心に深い感動を与えました。

恵理哉の場合は集会中騒いでてこずったという経験がほとんどないのですが、次男の時はそのむずかしさを経験しました。片手にスパイク棒を持ち、「静かに座っていないさい！」と言い、聞かない時は部屋の外に連れ出してお尻をよくたたいたものです。与志哉が小さい頃、日曜日は

教会学校、伝道集会、礼拝と長時間ずっと静かにお話を聞いていなければならなかったのです。日曜日だけ、急に大人と一緒に静かにしていなければならぬわけですから、子供にとって日曜日は受難日のように思えたかもしれません。私はそれを恐れて、本を読ませたり、絵を書かせたり、いろいろ工夫したものです。もちろん、それ以上に、日常生活の中で順応できるように心がけました。眠る時間、一人でベビーカーの中であそぶ時間、一緒に遊ぶ時間、聖書のお話を聞く時間などを決め、一日の生活を規則正しくするように心がけたのです。こうすることによって、私自身が子供に振り回されないように気をつけました。

私にとって、子供が眠っている時間は主と交わるデボーションの時であり、一人で遊んでいる時間は洗濯や買い物の時間です。日曜日の礼拝の時は、いつも眠る習慣をつけるようにもしてやりました。

恵理哉の時は聖書学院時代で内容は違いましたが、日常生活のルールを身につけ、手のかからない子として育ちました。一度習慣づけられると、決まった時間に自然と眠るようになり、また一人で遊ぶことも覚え、お話を聞くのも上手になっていきます。

次男の与志哉の時は、私たちが長期の旅行をしたり、家庭の中に人々の出入りが激しかったり、他人が同居するようになったりしたため、子供の習慣を規律正しく身につけさせることができず、後々にまで影響を与えてしまいました。

父親像

うちの子供たちには、私の背中に背負われた記憶がほとんどないと思います。私の背中をいつも占領しているのは主人でした。子供たちがヨチヨチ歩きを始めたらずを引いて歩かせ、転ばずに歩けるようになったら、小さな背中にも風呂敷包みを斜めに背負わせられ、私の後をチヨコチヨコ走ってついて来たものです。まだ歩けない時は私の小脇に抱えられて旅行しました。

自分の父親は歩くことができない、両手で物をつかむこともできない、終始母親の背中に背負われて生活しなければならぬということをお子供たちはどう受け止めるのか、どのような父親像を持つかが私にとって大きな課題でした。私が子供たちに与える印象も大きな影響があると思いました。そこでなるべく「あなたのパパは素晴らしいのよ。偉いのよ。努力しているいろいろなことを覚えてきたのよ」と、事細かに話して聞かせるように努めました。

「パパは歩けないから学校に行けなかったけれど、注意深く本を読んだり、人の話をよく聞

いたり、いろいろなものに興味を持ち、物事を知らうと努力したのですよ。」
「ママは高等学校まで行ったけれど、パパほど物知りではありません。漢字でもママよりずっとよく知っているでしょう。」

「パパは機械にも関心を持ち、動く方の手と足を使ってラジオも組み立てたことがあるのですよ。結婚してからはママも手伝ったことがあるけれど。聖書のお話だって皆さんにわかりやすく説明してあげられるでしょう。ママはパパのみことばの深い学びをとっても感動して聞いているし、それを聞くのがいつも楽しみなのよ。」

機会のあるごとに、父親の優れている点を引き出し、ほめたものです。

やがて恵理哉も与志哉もその父親に感激し、誇りと思うようにさえなりました。このように父親の優れたことを印象づけられ、やさしい、理解のある父親と体で触れ合って満足し、敬慕の念を持つようになりました。

小学校入学当時、担任の先生から「恵理哉ちゃんはお父さん、お母さんのことを誇らしげにいろいろと話してくれていますよ」と聞かされて、本当に感謝したものです。自分の父親の障害を恥じて学校へ行きたくないなどと言い出し、親も子も惨めに感じるようになったらどうしようかと恐れていたからです。

授業参観日にはパパとママが一緒に来てくれとせがまれて出席したこともありました。高校

では主人がPTAの役員を引き受けたこともあれば、大学時代は父親の講演を自分の大学でも皆に聞かせたいという企画してくれたものです。

次男の与志哉も大学の宗教強調週間の講師に「ぼくの父を呼んで下さい」と頼んだことがあります。教授陣も息子が自分の父親を尊敬して呼んでくれというほどですから、どんな父親だろうと興味を持って招いたそうです。

主人と私が大学に行った時、与志哉は誇らしげに迎えてくれました。大学のキャンパスの中から講堂へ続く長い石段を、父親を背負い、皆の待つ講堂へと勇ましく上っていったのです。学友たちの前でまったく恥ずかしがらずに、むしろ信頼と尊敬の念を父親に示す息子の堂々とした姿に、私は感動を覚えて目頭が熱くなりました。

障害者の主人

講壇で力強く語る主人のメッセージは、人に感化こそ与え、自分自身の劣等感、人を恐れることなどみじんも感じられません。

主人は「自分の人生は結婚してから始まったようなものだ」と言うことがあります。確かに彼が人並の生活ができるようになったのは結婚してからでしょう。それまでは、歯ブラシで歯を磨くこともできず、取ってもらおう、着せてもらおう、連れていってもらおう、いずれにしても人の手を煩わせ、世話にならなければならぬ生活でした。

不便な面においては、今も変わりはないのですが、主人という立場で生活できる世界は、かつての生活に比べて大きな変化にちがいないのです。歯槽膿漏からくる歯ぐきの出血の不快さも今は感じなくなり、気にしていた口臭も弱くなり、まれにしか入れなかつた風呂も時間があれば自由に入れる、髪も気持ちよく洗ってもらえる、外に出かけるのも妻と一緒に、自分の思い通り、外出、旅行、いろいろなプランを企てることのできるのです。そしてよく口にするの



結婚1か月後初めての旅行先大阪にて

は、「私は主人なのだから、だれに遠慮することもない、あれもこれもできるのだ」ということばです。ごく普通のことに対しても主人となれた幸いをかみしめるのでした。

旅行先で、しばしば私と主人の靴を並べようとして探す方がいます。もちろん見つかるはずはありません。座っている分には、障害者だと気づかれない彼の体型、明るさから、メッセージしている顔を見ているだけでも恵まれると言う人がいるくらいです。今や彼は主にあつての自信と信念、救霊に対する熱心とで明日へ生きる情熱に燃える人へと変えられたのです。私が初めて会った時の囚人服のような青い鉄道員の作業服を着た哀れな印象などは、みじんも残っていません。こんな主人を私は慕わしく思うのです。主人の上にな

された主の豊かなみわざです。

私は結婚するまで、彼の生活の困難さが手足の不便さだけでなく、体内の臓器の障害にもよるのだということに気づきませんでした。

私たちは普通、体の成長、発達期において、内臓もそれに伴って成長、発達し、調和が保たれているはずです。彼の場合、ちょうどその時期、小児麻痺で体も内臓も発達しなかったのです。寝たきりの生活から、自分の背骨で自分を支えて座れるようになったのも割合大きくなっただけだったのです。そういうわけで、肉体のいのちを支えるというべき心臓、肺の働きが、普通の人と違うのは当然のことでした。

独身時代、私は早朝主と交わることを最も大切なこととしておりましたので、結婚生活もそのペースを守っていきたくて思っていました。しかし、そのペースを保つのは、主人の体にとって苛酷なことでした。それだけではなく、午前中は頭がもうろうとして何もできず、たとえ起床したとしても再び寝ることが多いのです。また、一食でも抜くと、目玉が飛び出しそうだし、言い、少し疲れ過ぎると心臓が苦しくなり、瞬間的に結滞（脈が瞬間的に止まること）するのです。普通、よほどやせていない限り、一、二食くらいは食べなくても、さほど問題とはなりません。それは手足、臀部に余分のエネルギーが蓄えられているからです。

主人の場合は、臀部がないため、ほとんどエネルギーを蓄えることができません。その代わ

り、絶えず働いている目の筋肉からエネルギーが取られるようです。「目が飛び出すようだ」と眼球の疲労感を訴えるのは、そのためでしょう。また、動く方の片手も、肩が動かないので、物を取る動作や上げ下げの動作、字を書く動作の場合、全身を動かして反動をつけ、手や肩から動かそうとします。このため、心臓に負担がかかるのです。それに、心臓の筋肉からもエネルギーが奪い取られるので、極度の疲労感を感じ、ショック状態となって結滞し、心臓が瞬間的に止まります。そしてその後で全身の力が抜けたようなけだるさを感じ、冷汗をかき、何もできない状態になるのです。

メッセージの途中でも幾度かそのような経験があり、背もたれがなければひっくり返ってショック死していたかもしれないのです。だれにも気づかれなかったそうですが、気を失いかけたこともまれではないと言っています。そのたびに心の中で主のみ名を叫び、助けられたのです。

主人が座っている姿勢もごく自然のように見えますが、背筋をピンと伸ばし、バランスを取るために、無意識のうちに絶えず緊張しているそうです。もし、だれかが肩に強く触れると、ひっくり返ってしまうのです。私の背中から降ろす時もバランスを取って降ろさなければひっくり返って頭を打つか、背中を打ってしまいます。主人の体は、頭が重く、過半数のような状態であることを常に考慮し、背負う時も注意しなければ危険です。慣れない人が親切に背

負って下さる時があるのですが、本人が気を遣い、緊張して堅くなり、落ちないようにしがみついているうちに具合が悪くなったこともあり、最近では、慣れている人か、私以外に背負われるのを嫌がります。

長時間腰掛けに座っていたり、トイレを我慢したりすると、顔、手足までもむくみ、心臓が痛くなることもあるのです。自分の部屋に戻ると、早く横にしてくれ、寝かせてくれと、それまでの体の緊張から一時でも早く解放されたいがります。

この内部の隠れた障害との戦いがどんなにたいへんなことであるのか、結婚するまで無知であった私でしたが、看護学院で一年なりとも勉強したことは、神様の恵みあるご配慮だったことと、しみじみ感じさせられました。

抱いてベッドに寝かせたり、起こしたり、体位を変えたり、夜中排便を取ったり、ベッドバス（ベッドに寝ながら体を洗うことができる）の使用等、一年間学んだ看護法を活用しています。

また、小さい頃に祖母の世話をして髪を結ったり、風呂に入れたり、着物を着せたりしたことも、結婚生活に役立つよう準備されていたのかもしれませんが。

「あなたは私のために備えられていた人です」と言われたことがあるのですが、私は「あなたは私のためにそのような体が許されたのですね」と答えたものです。「自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい」は神様のご計画の中にある私共二人に与えられたみことばです。

す。

主人が自分の障害を意識しながら行動していた時代は、周りの状況に素早く反応し、順応していくため、ことをわきまえ、知恵を働かせ、努力していたのでしよう。

彼の敏感さ、先を見通す賢明さは、結婚当初の私には驚きでした。

彼と一緒に寝て、布団の重みを私の体で支えて軽くしてあげるのですが、私が向きを変えるだけでもすぐ目を覚ますのです。彼よりも早く起きようと試みるものならば、その気配だけで、すっかり目を覚まし、それからは眠れず、その日一日中調子が悪くなります。昼寝もよその家ではなかなかできませんでした。眠る時も起きる時も私が一緒に、体に触れていなければ安心できないという状態で、時々、私がいなくなった夢を見て、びっくりして目を覚ますこともあったそうです。

結婚前は、風が強く吹いたり、大雨になったりすると、当時のことですから、ローソクとマッチを枕もとに置き、ズボンにすぐ足が通せるように広げて寝たということです。地震や物音にも非常に敏感で、戸締まりにも厳格で、毎晩のように「玄関にかぎをかけましたか」と聞きます。旅行に出かける時は、寝室に豆電球をつけ、カーテンを締めておくようにと細かい点まで気がつき、注意をしてくれます。

いざという時に備えて、前もって準備しておく賢明さ、その時になってあわてて失敗するよ

りも、ゆとりをもって行動しなさいと注意する陰に、障害者であることから自分では簡単にできない困難や問題を通して体得した彼なりの知恵によって、健常者では気のつかない細かい面まで配慮することができなのです。

そしてまた、幼少時代からのこの障害がもたらした悲しみ、悩みによって、主にあって人々に好感を与える温かい人柄へと変えられていったのです。

だれの言うことにも耳を傾け、受け入れてあげる思いやり、人々の心の奥深い悩み、悲しみをも解せる人、慎重、賢明な判断力を与えられて、伝道、牧会に携われるようにされたことも主の恵みです。

「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」

このみことばに頼りつつ、ただ祈りと信仰の戦いによって今日に至らせていただいた主人は、今ではいつでもどこでも眠り、海外での時差など問題としなくなりました。それだけ忙しく、時間を惜しみ、障害を乗り越えて働ける幸いに深く感謝しているのです。

主人を主人として

結婚した当時のことです。

畑仕事に使われていた大きなリヤカーに主人を乗せて町中を歩いていた時、友達に会いしました。「お兄さんを病院にお連れするの。」こう聞かれた私は「主人です」とためらわずに言うことができました。自分の心の中に、何らかの恥じらいがあったのでしょうか。

旅行先の上野駅や、人々のにぎやかに行き交う中で、若い私が自分より年上の男性を白い帯で縛って背負っている姿は、皆の目には奇異に見えたにちがいないのです。皆が私を注目しているようで、その場を小走りに通り過ぎ、人々の視線を避けたものでした。

主人と結婚したことは、夫の助け手となることでしたが、手足の不自由な夫の単なる看護婦的な助け手として結婚したはずではなかったのです。私が夫婦としての深い奥義を学び悟るまでには時間がかかりました。

性別が違い、まったく違う環境に生い育った者が一つとなって生活するということは、簡単

なようでもむずかしいものです。肉体の一体もさることながら、二人の心、精神が結び合わされなければ夫婦生活は素晴らしいものでも楽しいものでもありません。

妻である以上、良い妻であり、賢い妻でありたいと切に求め、願ってきました。箴言一二章四節には、賢い妻は夫の冠であり、夫の生涯を勝利ある生活に至らせ、愚かな妻は夫の骨の中の腐れのように、夫の生涯を敗北に終わらせる、まことに対照的な妻の姿が描かれています。これを読んで妻が夫に与える影響力の大きさに戦慄を覚えたものです。

主人との関係において、「あなたは私の主人です」と主人の立場を位置づけ、主人を主人として尊んでいくのが妻の務めであり、夫に従う原則でもあります。主人を理解し、ありのままの主人を受け入れることでもありました。

障害者と結婚したのですから、主人に対して健常者に対するのと同様の期待をしてはならないのです。主人は身体にハンディーを持った者として、幼い時から受け身で人に何かをしてもらうことに気を遣い、いつも遠慮がちで控えめな態度で暮らしてきたことでしょう。

しかし、結婚し、私の主人となったのですから、私を支配し家庭を治めていくという責任ある立場になったのです。私は、その主人を認め、彼を立てないかなければなりません。

主人が私に忠告したり訂正したりすることに否定的であつたり、口答えしたり、自尊心を傷つけるようなことを言うなら、主人は権威を持って支配することも治めることもできなくなる

銀婚式をわが家にて



でしょう。自分は家内に世話になつていゝ身なのだからと、自分を萎縮させ、自信のない、遠慮がちな態度で私に接するようになるかもしれません。ですから、私は、自分の意にそわないことであっても、彼の忠告を受け入れ、怒られた時は、黙って聞いていることが夫に従うことなのだと思うのです。そうすることによって、彼は主導権を取り、主人らしい権威を持つて治めることができます。

どこの主人にとつても同じでしょうが、自分の妻がとやかく言つたり、自分を矯正し、変えようとしていることがわかったら、男として、夫としてのプライドが非常に傷つけられるようです。

私は、主人がもっと霊的な指導者となるように、それにはもっと祈りの人となるように



西ドイツ、ライン河畔にて (1981年)

のでしよう (今は、台所のことは全部私に任せてくれています)。
妻は、夫を差し置いて優位に立つてはならないことも、私にとって学ぶべきことだったので
す。

と祈っていました。そんなある時、主人に「まるであなたに監視されているようだね。拘束されて
いるから、あなたが私の支配者ですよ」と言われたのです。主人はことばには出さなくて
も、私の態度で私の心の中を読んだのでしょうか。私は、たいへんショックでした。霊的な夫で
あるようにと祈る前に、霊的な妻であるように自分自身が砕かれて祈ることを教えられまし
た。

私の妻としての役割は、夫の意見を尊重して聞き、あなたは主人です、支配者です、治める
者です、家庭の保護者ですと、責任者であることに優越感を持たせ、権威を持たせることにあ
ると思いました。

結婚した当初から、経済的に定まったものではなく、神様に祈り、主がその都度必要に応じて
満たして下さったのですが、その与えられるすべてのお金は、主人が管理していました。十円
のお金でも、その時、その時、主人からもらうのです。主人がお客様と話している時など、そ
の接待のために何か買ってきたと思うても、話を中断させるのを氣遣ってもじもじすること
があり、とても不便なこともありました。

普通のご主人方であれば、自分の持つてくるサラリーを奥様に渡すとか、そうしないまで
も、主婦はいくらのお金を手元に持っていると思います。サラリーを持つてきたことのない
主人は、せめてお金を私にあげることで主人としての権威を保てるのではないかと思っていた

妻として

とかく私たち女性は、夫に対する妻としての役割を、男性のできない主婦の仕事、炊事、掃除、洗濯等をしてあげることのように思っているものです。確かにそれも大切なことですが、それらは表面的なことで、夫として男の求めているものはもっと内面の深い所にあるように思えます。

結婚して間もなく主人から「あなたは聖処女ですね」と言われたことがあります。「あなたは男の世界を何も知らないのですね」という意味だと思います。

私は小学生の時も男女共学の経験があまりなく、中高生時代はカトリックのミッションスクールでしたから、女子生徒だけの中で「正浄和」の学校教育を受けました。男の人との交際は一度もなく、主人に「何も知らない」と言われても仕方ないことでした。私よりもずっと大人だった主人は私に、男の世界をやさしく教えてくれたのです。女性から見た男性像と、男性の世界の男性像とがいかに違うかを知らされ、非常に驚かされました。女の立場から見た男

性像だけでは、夫を十分に理解できないし、決して夫の心には達し得ないことを気づかされたのです。同じように、女性から見た女性像と、男性から見た女性像も、とまどいを覚えるほど違うものです。

神様は人間を男と女という、全く違う特質を持った者として創造されました。初めに、女を含んだものとして男を創造し、男が成熟した時、「人が、ひとりでいるのは良くない」と言われて、男の中から女を創造されました。それが男と女の出会いでした。男は父母を離れて女と結び合い、女は再び男の中に戻り、夫婦一体となることが結婚の奥義です。

私たちが結婚生活を送るに当たり、その素晴らしさを味わうには、妻である私が入り、夫と一体とならなければなりません。

主人は「ママが死んだら、自分は一週間も持ちません」と言います。それは体の不自由さだけではなく、女としての助け手がいなければという意味だと思います。結婚して、男の人がどんなに女の助けを必要としているか、女の特質によって自分自身が満たされたいと願っているかを知らされました。

女性の特質は男性を魅了し、男性を男として目覚めさせ、男性の特質を引き出し、男を男たらしめていくものです。聖書からこの男女の深い立場を知らされるまでは、男女同権とは、女性も男性と同じ立場に立ちその権利を主張することだと思っていました。しかし、本当の同権

とは男性が男性の特質を発揮し、女性が女性の特質を発揮するところにあるのだと思います。女性がその特性、特質を見失い、何が女性の特質なのかわからなくなっているのが、今日の女性像です。ですから女性は今こそ神の創造の原点に返り、罪で狂い、失われてしまったその特質を再び新しくされるよう祈り求めるべきではないでしょうか。

美しくなりたい、美しく飾って男性を魅了したいという本能は、だれもが持っています。それもある面では必要かもしれません。しかし聖書は、「心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい」と言っています。柔和で穏やかでしとやかな霊こそが、男性を魅了し、慰め、励ますものであり、男性の求めているもののなのです。

結婚当時の主人は、私にちようちよう結び（高校時代の髪型）をするように望み、黒い布地のすそに白い柄模様の入ったスカートが大好きでした。可憐でやさしく、素直で従順な女性像を描いていたのです。主人の口からよく出ることは「可憐で、愛らしい」です。

どこの夫も、自分の妻が、いつもにこやかで明るく笑顔をたたえ、やさしい話し方をし、立ち居振舞も服装も上品で女性らしいことを願っています。私の主人も、私の服装や髪型に非常に関心を持っていて、自分のイメージを私に反映させることに喜びを感じているようです。

今の私の髪型も主人の好みです。また、服装も主人が見立ててくれることが多く、華やかで明るい色彩、若いデザインのものを選んでくれます。今は忙し過ぎてこんな機会はあまり取れ

なくなりましたが、それでもハンドバッグや時計、メガネ、指輪などは主人からのプレゼントです。誕生日、結婚記念日、クリスマスには必ずプレゼントを贈ってくれるのです。主人は高くても気に入るものがあれば、気前よく買ってくれます。

王は王にふさわしい物を妃に贈るように、妻の服装や持ち物を見ればその夫の地位、立場がわかります。私の主人も自分のイメージが妻に反映されているのを見て満足し、私が夫を誇りとしているのを見て満足します。人々は私の服装、持ち物、振舞を見て私の主人を知り、その背後にある主の祝福を知ろうと思うのです。このように、自分の愛している者を満たしてあげることは、主人の男としての喜びでもあるのです。

また、妻が女性の特質で満たされているならば、夫は男のやさしさ、弱い者を危険から守ろう、保護してあげようとする男の特質を持って妻を満たしてくれるのです。

私はひどく寒がりです。主人はそれをよく心得ていて、旅先でもいろいろ配慮してくれることを忘れません。暑がりの主人ですが、寒がりの私のために、いとわずいろいろ工夫して暖かくしてくれるのです。

不自由な体ですが、女性の苦手な機械、ストーブなどの故障は主人が一生懸命修理します。私のネックレスの鎖のはずれたものまでもていねいに直してくれました。このように主人として夫としての役割を果たしてくれています。

さを妻に知ってもらおうとしたこともあります。またある時は兄と妹のような立場で語り合い、論争し、意見を交わすのです。これもまた楽しいことです。

妻にとって、立派な家に住み、夫が立身出世することも必要でしょうが、それ以上に夫に愛され、慕われることが必要なのです。今では夫なしの私はなく、私なしの夫もありません。肉体的には主人を背負っていますが、私こそ夫に背負われ、その欠けたところを補われ、守られている者なのです。

私たちは愛し、愛され、それぞれの特質を互いに共有し合い、夫婦としての絆を楽しく素晴らしいものとして、三十年間歩んできました。それは私たち二人を合わせて下さった主の恵みでした。そのみわざを覚え、変わらぬ主のみ名の栄光をほめたたえます。



ハワイにて (1984年11月)

また、妻としての私の大きな役割の一つは、夫の求めているものが何であるのか具体的に時に応じて知り、その求めに順応できるようにすることです。

主人にとって、その日が非常に忙しく、疲れてしまった時、母親のようにやさしく胸にもたれさせ、心ゆくまで甘やかし、リラックスさせてやります。そのような雰囲気、工夫してつくることも女のやさしさから出てくるものでしょう。子供が母の胸で安心するうちに、夫が妻の胸をどんなに慕うものであるか私を知ったことは大きな助けでした。

夫が妻を娘のようにかわいく思い、あはしてあげたい、こうしてあげたいと思っていることを、喜んで受け入れてあげたらと思います。ある時は嫁にやる娘のように、気前の良



左より恵理哉、与志哉、萬利(前)、幸子

あとがき

私共が結婚してからちょうど三十年目。札幌に移ってきてちょうど二十年目。この節目ともいふべき年に、自分の今までのことを一つの文にまとめることができてもうれしく思います。

以前から、私共のことを知っている方々より、神様がこんなに導いて下さったのだからそれを書くべきだと勧められていたのですが、今回このような形でその機会を与えて下さった「いのちのことば社」に対して、深く感謝の意を表する次第です。

さらにまた、ご多忙の中からこんな者たちのためにわざわざ序文をお書き下さった三浦綾子先生には、身に余る光栄と存じ、心からの感謝とお礼を申し上げさせて頂きます。

最後に、自分も原稿書きをしながら何かと私の世話をし、協力してくれた妻の労をねぎらうと共に、陰にあつて原稿のでき上がりを祈りによって支えてくれた教会員の兄弟姉妹の一人一人に、心よりありがとを申し上げます。

一切のご栄光を主に帰しつつ。

一九八五年十一月

三橋 萬利

旅行先で、あるいは飛行機の機内だと落ち着いて書くことの少ない中で、書くのに不慣れな私が、限られた時間内で限られた枚数にまとめることの難しさに、ただただ主様の御助けを仰ぐのみでした。

「主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」のみことばにあるように、いつの日にか主様が私たちに下さった恵みを書き記したいと思っております。主様のなさって下さった恵みの数々を書き表すのには誠につたない文章ですが、これを読んで下さる方々に、今も生きて働かれる主様の御恵みをおわかり頂ければと願わずにはおられません。

こんなふつつかな者を心にかけ、この機会を与えて下さいました「いのちのことば社」には心から深く感謝致しております。

私が書くためにいろいろと不便を耐えてくれた主人と、陰にあつて配慮と祈りによって支えて下さった主にある兄弟姉妹たちに感謝しております。

すべての栄光を主に帰しつつ。

一九八五年十一月

三橋幸子

北国に駆ける愛

定価1200円

1985年11月25日発行

1986年1月10日再刷

著者 三橋萬利
三橋幸子
印刷 いのちのことば社印刷部
発行所 いのちのことば社

160 東京都新宿区信濃町6
乱丁落丁はお取り替えます

Printed in Japan © 三橋萬利 1985
ISBN4-264-00750-X